

## 「ゲマインシャフト」に立脚した教育

—Peter Petersen ~ Heinrich Dopp-Vorwald

の系譜において——

伊藤 暢彦

ペーターゼンは人間の生活様式や社会そのものの変化を当然と考えていたが、来るべき時代に対する「展望」として唯一信じて疑わないものがあった。それは「その社会が、積極的に、喜んで、親切に、思慮深く、自ら負担を引き受け、担える能力と心構えをもった人々を手にはじめて、窮乏や対立、闘争等が取り除かれるに違いない」という信念である。そして、そのような積極的役割を担い得る人間形成の「場」こそが「ゲマインシャフト」(Gemeinschaft)であり、またそのための理念が「ゲマインシャフト」に立脚した「教育」(Erziehung)の理念なのであった。

ペーターゼンにとって、我と汝は、止揚しがたい相互関係の内に存在していた。それゆえ、個々人の人間生成もまた決して完全には己れの意のままにはならない。この意味で真に「独自なるもの」とは、「ゲマインシャフト」に立脚する限りにあって、はじめて成就し得るものである。そしてそれゆえにこそ、日々の教育実践においても「汝」の存在は、「我」の成長と自己充実にとって根本的なものと見做されたのである。ペーターゼンは、真の「自由」を「人間生成」そのものと関わり、現実の諸々の「拘束」や「制約」の中で不断に「自己限定」を行なう過程で獲得される「拘束ある自由」と解していたが、「ゲマインシャフト」に

立脚した教育とは、正にそのような本来的な意味での「自由」を子どもの中に実現させ、「個性」を「人格」にまで高めようとする試みに他ならなかった。

ところで、デップルフオアヴァルトは、「真の知育は徳育につながるなければならない」という所謂「教育的教授」論を「ゲマインシャフト」に立脚した教育の立場から展開しているが、それは今日の学校教育における「知育は必ずしも徳育につながる」という深刻な事態を克服するためにも極めて重い意味をもつものである。

デップルフオアヴァルトは、教育を「人間生成の視座の下に見られた人間の十全な世界内存在」と規定する。人間にとって最も広い意味での「世界」とは、神と無の間の数多の現象形態をとって立ち現れる「他者」であり、この意味で人間の世界内存在は「他者からの存在」(Von-andere-her-sein)と言える。そして人間がこのような形で「世界に開かれてゐる在り方」(Weltoffenheit)が「ゲマインシャフト」として理解されていたのである。人間の世界内存在にとつてまず問題なのは、何かある抽象的な一般性におけるような存在一般ではなく、つねに具体的で、一回的・個別的に、身近な数かぞえきれぬ姿で人間に要求し応答を迫るものとして「体験される」事柄である。デップルフオアヴァルトは、「リアリズム」を「即物的なるものの形において判明なるものを明瞭にし、なおかつそのような現実に対して従順な肯定的態度を問題にする立場」と解していた。つまり「ゲマインシャフト」とは、端的にはこのようなリアリズムの立場において体験される事柄と人間の間の「存在結合」の謂であり、したがってそれは、現象学的・存在論的に記述され得る人間の本質的な存在の

在り方を意味するものであった。

無論、この「ゲマインシャフト」という人間存在の在り方は、分離・分裂の意味で「歩み出す」ということではなく、世界と渾然一体になって「現れ出る」あるいは世界と「一致する」在り方を指示していた。つまりそれは、認識論的には「主・客」という二項の対立を強調するのではなく、両者の「一致及び被拘束性」を強調する立場をとり、したがって認識とは、つねに特殊で一回的な形で認識者に立ち現れてくる「存在の表現」と見做されていた。

人間が独り自分自身を頼りとし、例えば世界を主観の客体や構成物と見做したり、理想主義的な意味での「自律」や「自由」へと努力したりするとき、人間は自ずから「ゲマインシャフト」から引き裂れている。逆に、人間が世界に開かれ、つねに他者からの存在であるとき、人間は「状況からの呼びかけ」に応答しているという意味で、自らの「被拘束性」を充たし、自己の「責任」あるいは自己の「本分」を全うしていると言える。つまり、「ゲマインシャフト」からして感じ、考え、行動する限りで、人間はもう既に自己の本分を充たすことによって「生の充溢としての徳」に達しており、改めて「自己立法」を行なうまでもなく、十分に倫理的である。

我々は、真にある事実の性質や意味、あるいは事柄相互の連関や法則性を理解し得たとき、無上の喜びとともに、自己の在り方や行動を根柢から揺り動かし、自己変革を余儀なくさせられるような不可思議な力に捉われることを経験的に知っている。デュープⅡフォアヴァルトによれば、正にそのような機能を有する教授活動こそが真の「教育的教授」であり、個々の教材や対象に内在す

る法則性への従順を通じて存在の秩序への信頼や畏敬が涵養されるはずであった。しかし、「ゲゼルシャフト」からの要求と、合理的・法則的・体系的教授活動への過信から、「教育的教授」は形骸化の一途を辿り、今日多くの場合、教授活動は「教育的」には作用せず、単に最も効率的な「業績」を追求する活動に成り下がってしまったことは周知の事実である。

今日例えば、「ゲマインシャフト」の母胎として機能していない例は決して珍しくないし、文部行政は「内面的な」学校改革には殆ど無関心であり、その結果、学校教育は「ゲマインシャフト」に立脚した教育からは程遠い状況にある。ペーターゼンの意図した「教育」とは、人間存在にとって正しく $\alpha$ にして $\omega$ なものであった。その $\alpha$ としての「教育」が瀕死の危機にある現在 $\omega$ としての「教育」、延いては人間存在の将来もまた昏いと言わざるを得ない。このように、生き生きとした「教育」が次第に我々から喪失していく中で、「教育」の実現に積極的に関わろうとする意欲や態度が希薄化したのは至極当然である。そのような事態を克服するためにも、「ゲマインシャフト」に立脚した教育という問題の厳粛な意味を再吟味し、それを抱り所として、人間存在にふさわしい生と教育の在り方を真摯に見つめ直すことは、極めて重要かつ緊急の課題ではないだろうか。